

# 聴覚障害幼児の言語発達を支援する音声・手話・指文字

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 特任教授 大土 恵子

## 【研究の目的】

アメリカの EHDI (Early Hearing Detection and Intervention)は、聴覚障害に関して出生後1か月までに新生児聴覚スクリーニング検査、3か月までに精密検査、6か月までに療育を開始する 1-3-6 goals を提唱した。本邦においても新生児聴覚スクリーニング検査が開始されてから、四半世紀が経過した。新生児聴覚スクリーニング検査の普及は聴覚障害幼児の言語発達に良い影響と効果を及ぼしていると考えられる。

本研究は、聴覚を活用しながら日本語の音声言語発達を支援する場合に、音声だけではなく手話と指文字を併用し、どのように視覚的支援を行うことが有効であるかを検討することが目的である。

## 【研究の背景】

従来より聴覚障害児教育では、聴覚障害児にとって音声日本語の助詞の獲得が難しいと言われてきた。脇中(2012)は「助詞の使い分けとその手話表現,第1巻,第2巻」を著し、その中で類似した文章の助詞についての日本語の文意を詳細に説明し、その助詞を適切に表現できる手話表現を図示した。その他にも助詞の指導に関する先行研究は数多い。

文部科学省(2020)聴覚障害の手引きでは、助詞以外に獲得が難しい語として、抽象語、擬音語、擬態語があげられ、書き言葉に関する困難さとしては語句の形態的誤り、意味的誤り、文法的誤り、論理的接続の誤りが挙げられている。また渡辺(2025)は助動詞の獲得も難しいことを指摘した。

本研究では先行研究がまだ数少ない助動詞や擬音語の獲得に焦点を当て、音声言語に手話と指文字を併用する視覚的表現に関して検討する。

## 【研究の方法】

まず、日本語マッカーサー言語発達質問紙(語と文法)の項目にある30の助動詞を対象に、手話の有無を調査し、手話表現を検討した。手話のない助動詞については指文字による表現方法を検討した。

次に、幼児教育で用いられる絵本を用いて助動詞や擬音語の具体的な用法の検討を行った。

## 【研究の結果】

日本語マッカーサー言語発達質問紙(語と文法)の項目にある30の助動詞には、手話がある語と無い語、表現方法が同じ手話になる語があった。また二つの手話をつなげて使用すると適切な表現になる語もあった。そのため、同じ手話表現になってしまう助動詞はその弁別のために手話だけではなく口形をはっきりとさせた音声を使用し、継時的に指文字表現を行うことが望まれる。以下に一部の助動詞とその手話表現を記載する。

まず、助動詞に特別な表現を必要としない助動詞は「る」であった。通常の動詞原型の語尾であることから、手話の動詞原型を使用することにより表現できる。

次に、「させる」などの使役の助動詞については文

中の対象を指さしして表すことが理解を助けられると思われる。対象を指さしたうえで、口形で「させる」とはっきり表し、「ました、させた、なかった」等の過去形の助動詞については、語尾に「終わる」あるいは「完了」の手話をつけて表現することによって視覚的に表すことができる。「れる・られる」は「大丈夫・可能」の手話で表すが、同じ手話表現となるため「れる」なのか「られる」なのかは口形と指文字で表す必要がある。「～たい」は「～たい・好き」の手話を使う。「～たくない」は「～たい+ない」の手話ではなく、手話の用法と同じ「いや」の手話と「たくない」の音声を用いることが自然だと思われる。

否定形の活用助動詞は、語尾に「無い」の手話を付けることによって表す。

実践例として、中川・大村(1963)による「ぐりとぐら」の手話表現を検討した。最初の一文は以下のとおりである。「のねずみのぐりとぐらは、おおきなかごをもって もりのおくへ でかけました」絵本の文全体の中に使用されている助動詞は「ました」が25回、「う」が7回、「ます」が2回、「でしょう」「ん」「た」が各1回であった。頻出した「ました」については1回目に動詞+「完了」の手話で表し、経時的に「ました」の指文字をつけ、2回目以降は手話表現のみで表現すると、スムーズに絵本の流れを進めて表現することができると思われる。7回使用されている「う」については動詞に引き続いて「いこう」の手話を使い、指文字は使わない。動詞に続いての「う」のひらがな表記であるが、実際の発音が「お」であるため、混乱を与えると考えるからだ。5歳児後半になりひらがなの読みを理解し始める幼児が多い場合は、「う」と書いてあり、発音は「お」であることを1回目に説明し、それ以降は手話のみで表現する。

次に若山(1972)の「しろくまちゃんのほっとけーき」の手話表現を検討した。最初の一文は以下のとおりである。「わたし ほっとけーき つくるのよ」本作品の文章は体言止めが多く、使用されている助動詞は「た」が最多で3回、「ます」が2回、「ました」が1回と、回数は少なかった。一方、聴覚障害児にとって獲得が難しい擬音語が、ホットケーキを調理する表現として13回使用されていた。それぞれを的確に表す手話表現を決定することは難しいため、擬音語を表現するためにその意味を表すジェスチャー、指文字、などを口形に合わせて使用し、保育者と幼児と一緒に擬音語を繰り返して楽しむことが擬音語に親しむきっかけとなると考えられる。

## 【結論】

幼児が親しむ絵本読みを標的として、手話、指文字表現を検討し、助詞、擬音語に関して表現方法を検討することができた。今後は、日本語では「いこう」と表記して「いこお」と発音するなど、聴覚に障害があると理解が難しい語についての支援などの新たな課題について検討する必要がある。